

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380793

研究課題名(和文) ソーシャル・サポートを活用した中途視覚障害者支援システムの構築に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study on the Creation of a Social Support System for Individuals with Acquired Visual Impairment

研究代表者

柏倉 秀克 (KASHIWAKURA, Hidekatsu)

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40449492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：事故や病気で失明した人は心理面で深刻な状況に置かれる。本研究では当事者の心理に寄り添うソーシャル・サポートに着目し、援助方法を検討した。その結果、(1)直接かかわりあう他者と本人のメンタルヘルスに有意な関連が示された。(2)この分野で先駆的なイギリスとドイツを調査した結果、地域における社会資源の連携や多職種連携においてわが国が参考にすべき支援システムがみられた。(3)本研究で得られた援助方法を試行した結果、従来の方法で解決困難な事例に一定の効果がみられた。

研究成果の概要(英文)：Individuals who have lost their vision due to accident or illness are placed in a difficult psychological situation. This study focuses on social support for such individuals and considers means of assistance. The study's results suggest the following aspects: (1) there is a significant relationship between an individual's mental health and those who directly interact with the individual. (2) Based on the results of surveys in the UK and Germany, which are both pioneers in this field, this study found that support systems in those countries should be considered in Japan in terms of such aspects as partnering with local social resources and multidisciplinary partnerships. (3) In testing assistance methods as part of this study, a certain measure of results were seen in cases that would have been difficult to resolve by traditional methods.

研究分野：障害者福祉

キーワード：視覚障害者 ソーシャル・サポート ピア・サポート リハビリテーション心理

1. 研究開始当初の背景

(1) 中途視覚障害者の困難と援助研究

視覚障害者の自立支援は、伝統的な理療業に依存する形のまま今日に至っている。この方法では視覚障害者のニーズに十分対応していない。本研究では中途視覚障害者問題をとらえ直すとともに、この問題の固有性に留意し、援助方法の再構築が必要だと考えた。

中途障害による困難は心の健康に強く作用する。近年、ソーシャル・サポートが注目されており、家族、仲間による支援が受障者のメンタルヘルスを高めるとする知見が報告されている。本研究では従来の援助研究を整理し直すとともに理論的実証的研究に取り組み、中途視覚障害者の障害特性を考慮した支援システムの提案を課題とした。

(2) 中途障害者のソーシャル・サポート

中途障害による困難は、当事者の精神面に強く作用する。中途障害者に対する援助研究では、精神面の回復を促す方法として、ソーシャル・サポートが注目されている。この方法は、リハビリテーション心理学の立場からも注目されている。さらに視覚障害者のメンタルヘルスとソーシャル・サポートの関連は、国内外の複数の調査で注目されている。なお研究代表者はこれまで中途視覚障害者のメンタルヘルスを調査し、中途視覚障害者の回復とインフォーマルケアの関連を分析した結果、支援を受けた人々においてメンタルヘルスが有意に高まる知見を得ている。

2. 研究の目的

従来の中途障害者に対する援助研究は、肢体障害者を中心になされてきており、視覚障害者に対する研究は限られたものとなっている。

本研究では中途視覚障害者の心理面に配慮した援助方法として「ソーシャル・サポート」に着目する。障害者地域生活支援センターにおいて支援実践を試行し、その効果を検証するとともに中途視覚障害者に効果的な支援システムの提案を目的とする。

3. 研究の方法

研究期間を通して、中途視覚障害者の心理的問題に着目した援助方法を理論的に検討するとともに援助システムの開発を目指した。

(1) 中途視覚障害者問題を歴史的に考察するとともに視覚障害者問題の特質を把握し、ICF (WHOの国際障害分類) の視点から視覚障害者問題を考察した。中途視覚障害者を対象にメンタルヘルスに関する調査を実施し、考察した。

(2) 中途障害者のメンタル面を支援する研究について整理し、受障者の心的困難の緩和に効果的な支援のあり方を検討した。中途視覚障害者のメンタルヘルスとその関連要因に関する調査を実施し、考察した。

(3) 障害者地域生活支援センターにおける相談支援事業に研究代表者の提案する支援システムを取り入れ試行し、その効果を実証的に検討する。英国・ドイツにおける視覚障害者支援事業を実地調査し、支援システム構築へ向け示唆を得ることができた。

4. 研究成果

(1) 中途視覚障害者問題の把握

職業リハビリテーション施設における中途視覚障害者の適応状況を調査し、前回調査 (平成 16 年度) との比較を試みた。さらに筑波大学が平成 22 年に実施した全国視覚障害児者実態調査、その他の統計資料を分析し、中途視覚障害者問題の全体状況を把握した。

(2) ICF の視点からの考察

中途視覚障害者援助における研究上の諸問題について「障害受容モデル」を中心に検討し、研究課題を明確化した。上記の調査で明らかとなった中途視覚障害者が抱える問題を ICF の視点から考察した。その際、障害者自立支援法下における生活問題、平成 19 年に開始された特別支援教育における就労支援の問題、リハビリテーション医療やリハビリテーション心理領域における障害受容の問題を検討課題に加えた。

(3) 中途視覚障害者の心的困難 (調査)

視覚障害者の困難を理解するために、受障原因の多くを占める代表的な眼疾患に着目し、その病理と障害特性、生活上の困難、メンタルヘルスに及ぼす影響を調査した。その際、緑内障、黄斑変性、糖尿病性網膜症に代表される加齢性眼疾患の増加に伴い中途視覚障害者が近年増加している問題に着目し、その対応を考察した。

調査対象は視覚障害者の自立を支援する各種社会資源とし、障害者地域生活支援センター、眼科医療機関、リハビリテーション病院、職業リハビリテーション施設を取り上げ、支援の現状と諸課題を分析した。この調査に関しては、名古屋盲人情報文化センター、筑波大学附属視覚特別支援学校、名古屋市総合リハビリテーションセンターと連携し調査研究を進めた。

(4) 障害者相談支援センターにおける調査

調査の目的は、支援センターのピア・サポート活動に参加する在宅の視覚障害者の実態を把握するとともに、参加者へのグループ・インタビューを通してピア・サポート活動の効果について考察することとした。

調査の対象は、本研究の趣旨に賛同する 10 人 (男性 2 名、女性 8 名) である。障害のレベルは、身体障害者手帳 1 級が 5 人、同 2 級が 5 人である。

質問項目は、ピア・サポート活動に参加した契機、活動に参加することによって得られたこと、活動に参加することによる精神面の

変化とした。調査は1回60分程度とし、3回に分けて実施した。得られたデータはコードとして取り出し、類似したコードをカテゴリーにまとめた。

抽出されたカテゴリーは、生きづらさを補うための活動への参加、障害を抱えて生きることの苦しみ、活動の目的は点字の習得から仲間との交流へ、活動による心理面の回復であった。

リハビリテーションの臨床現場において、当事者の「元気」と「自信」は心理的回復の目安として着目する専門職が多い。ピア・サポートを受けた活動参加者の多くは元気と自信を取り戻すことによって社会参加が進むケースが増えていた。具体的には外出の回数が増える、あきらめていた趣味に再び取り組む姿などである。

本調査の結果、支援センターの活動は閉じこもりがちな視覚障害者の社会参加と心理面の回復を促進する効果を持つことが明らかとなった。各種の活動を主催する支援センターは参加者にとって安心できる居場所となっているが、全国的にその存在に偏りがある。活動場所を広げていくためには公的な支援が求められる。さらに相談員（ピア・サポーター）の絶対数やその待遇は満足できる水準にほど遠いのが現状であり、その改善が求められることが示唆された。

(5) イギリスにおける実地調査

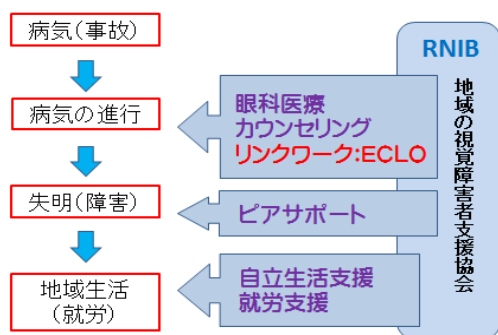


図1 イギリスにおける中途視覚障害者支援とECLLOの位置

ロンドンにあるRNIB (Royal National Institute of Blind People: 英国視覚障害者協会) 本部において、ECLLO (Eye Clinic/Care Liaison Officer) について調査した。さらにマンチェスター郊外のオールドハムにおいて、インクルーシブ教育を実践している中等学校 (The Blue Coat School) を調査した。

イギリスでは眼科医療機関で障害告知がなされる際、RNIBから派遣されたECL

Oが立ち会い、退院後の地域生活に向けた支援が開始される。

ECLLOとは、イギリスの社会福祉分野や医療分野に特徴的な“Link Worker”が特化したものである。通常眼科病院内に籍を置き、治療の結果として視覚障害となる患者に対し、院外の社会資源とリンクさせて退院に向けた支援を行う専門職である。わが国ではこの機能を医療ソーシャルワーカーや視能訓練士が担っているが、必ずしも専門性の面で十分な支援となっていない面があり、ECLLOはこれを補う専門職として注目されている。現状ではイギリス全土に23名が配置され、今後42の眼科医療機関への配置が計画されている。実地調査ではECLLOが果たす役割について、支援事例を中心に聞き取り調査した(図1参照)。

イギリスは1995年に障害者差別禁止法を制定し、視覚障害児の多くは特別支援学校(盲学校)から地域にある通常の学校に通学するようになっている。学齢期の障害児は障害の有無に関わりなく地域の学校で学ぶことになった半面、深刻ないじめや引きこもりといった問題がクローズアップされてきた。実地調査ではイギリス全土で実践されている障害平等研修(DET: Disability Equality Training)の実際を視察し、教育委員会が派遣する巡回教師や担当教員を対象に聞き取り調査を実施した。

(6) ドイツにおける実地調査

ドイツにおける視覚障害者支援は歴史が古く、受障後の自立に向けた特色ある取り組みがみられる。調査ではマールブルグにある視覚障害児者を対象とする特別支援学校(blista: Deutsche Blindenstudienanstalt e.V.)と関連リハビリテーション施設、ピュルツブルクにある視覚障害者を対象とする総合的なリハビリテーション施設(BFW: Berufsförderungswerk Würzburg)を実地調査した。

blistaでは、視覚障害教育と視覚障害リハビリテーションとの連携(Carl-Strehl Shule)をテーマに視覚特別支援学校(ギムナジウム)と視覚障害リハビリテーション施設を視察し、専門職を対象に聞き取り調査を実施した。

BFWでは、ロービジョン(弱視者)ケアと就労支援との連携をテーマに視覚障害リハビリテーション施設と職業リハビリテーション施設を視察し、専門職を対象に聞き取り調査を実施した。さらに両国の実地調査で得た知見を参考に、本研究で提案する支援システムを検討した。

(7) 支援システムの実証的検討

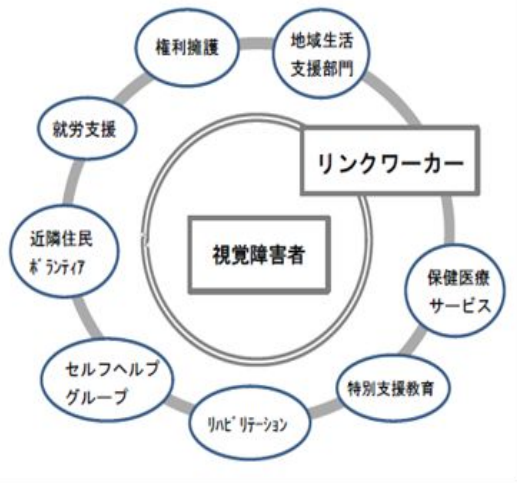


図2 中途視覚障害者に対する支援モデル

名古屋盲人情報文化センター、名古屋市総合リハビリテーションセンター、筑波大学附属視覚特別支援学校の協力を得て、援助方法を実証的に検討した(図2参照)。さらに従来の援助方法で解決が困難とされた中途視覚障害事例を対象とする支援システムを試行した。なおこの結果については、日本福祉心理学会の研究誌に投稿予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

石田真理、柏倉秀克、介護保険サービスと障害福祉サービスの併給をめぐる問題 - ケアマネージャーへの意識調査を中心に、保健の科学、査読有、58(1)、2016、pp.65-70

柏倉秀克、在宅視覚障害者に対するピア・サポート活動の効果 - 参加者へのグループ・インタビューから、保健の科学、査読有、57(3)、2015、pp.209-213

柏倉秀克、視覚障害生徒に対する情報保障 - 点字教科書の編集に着目して、日本福祉大学研究紀要 現代と文化、査読無、130号、2014、pp.1-13

長崎龍樹、柏倉秀克、軽度視覚障害者の心理的負債感に関する調査、保健の科学、査読有、56(7)、2014、pp.489-494

柏倉秀克、中途障害者のこころのサポート、大阪保険医雑誌、査読無、41(558)、2013、pp.10-14

〔学会発表〕(計3件)

柏倉秀克、イギリスにおける視覚障害者支援の現状 - E C L O (Eye Clinic Liaison Officer) に焦点をあてて、第14回日本福祉心理学会年次大会、2016年7月3日、筑波大学、茨城県つくば市

柏倉秀克、在宅視覚障害者に対するピア・サポート活動の効果 - 参加者へのグループ・インタビューから、第13回日本福祉心理学会年次大会、2015年10月12日、東京福祉大学、東京都北区

大橋いづみ、柏倉秀克、視覚障害者の生活支援に関する研究 - 弱視者に白杖携行を促す支援に着目して、第52回日本特殊教育学会大会、2014年9月21日、高知大学、高知県高知市

〔図書〕(計3件)

名川勝、村田淳、柏倉秀克、高橋知音、大学・短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告(平成28年版)、日本学生支援機構、2016、印刷中

名川勝、野内友規、村田淳、柏倉秀克、高橋知音、大学・短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告(平成27年版)、日本学生支援機構、2015、pp.39-57

柏倉秀克、井川淳史、山本雅章、中村強士、高梨未紀、山村史子、長崎龍樹、浅原千里、エッセンシャル社会福祉学、久美出版、2014、pp.89-112

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柏倉 秀克 (KASHIWAKURA, Hidekatsu)
日本福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：40449492

(2) 研究協力者

青松 利明 (AOMATSU, Toshiaki)
筑波大学附属視覚特別支援学校・教諭

佐藤 紀子 (SATOU, Noriko)
日本大学・歯学部・准教授

葛間 雅由 (KUZUMA, Masayoshi)
社会福祉法人愛光園・施設長

青松 紀野 (AOMATSU, Kino)
横須賀市点字図書館・司書